

猪 1 狩人を尋ねて = = = 猪・鹿・狸より

はや三、四年前にもなるかと思うが、狩りの話が聴きたくて、以前狩人だった男を尋ねて行ったことがある。前から知らぬでもなかったが、前身が狩人のことは、つい少し前に初めて知ったのである。

生憎だったが、今日は山田へ田繕しに行ったと家人の言葉を聞いた時は、ちょっと落胆したが、さらにその田を訊いて出かけて行った。街道から山道にかかって、二、三町進むと、窪を越した向うに、柴山をひどく切り崩した址が見えて、すぐ判った。新しく畔を築いて、幾段にもできた新田の一つに、腰が弓のようになった白髪の男が余念なく土を篩っている。傍らには頑丈な手押車が置いてあった。かねて耳の遠いことは聞いていたので、傍らへ寄ってから大きな声で来意を告げると、初めは何とも合点のゆかぬ顔つきであったが、だんだん話すうち得心がついたか、にやにやと格好が崩れた。やがてびっくりするような声で笑ってから、そんなことが何かの役に立つかと言うて、さらに愉快そうに笑ってすぐ話し出した。

一六の年から猪追(ししぼ)いをやったそうである。そして近間の山という山は悉く歩きつくして、時には遠く伊勢路まで入り込んだこともある。ある年奥郡〔おくごおり・渥美郡伊良胡崎〕に猪がたくさんいる話を聞いて、朋輩と二人で出かけた時のこと、赤羽根の海辺を鉄砲舁いで歩いて行くと、岸からわづか離れた岩の上に、鶺鴒が零れるほど止まっていたそうである。そこで慰み半分に一発放してみると、鳥は驚いて一時に飛び立ったが、そのうち一羽は海の中へ転げ落ちた。そして波にぶかぶか浮かんでいるのだが、二人とも山猿の悲しさにどうすることもできなんだ。そのまま見捨てて行こうとすると、近くの畑で様子を見ていた男が飛んで来て、デシ殿あれはいらぬかいと言うて、ざんぶり海へ飛び込んで拾ったそうである。デシとはこの附近で専ら狩人を呼ぶ言葉であった。

この話を聴いていると、春先の日のぼかぼか当たった海辺を呑気そうに歩いて行く狩人の姿が見えるようである。狩人の中には、居廻りの山谷ばかり守ることをせず、獲物を求めては山から山を渡り歩いて、ほんのわずかの間しか家に還らぬ者もあったのである

今年七七だと言うたが、十数年前四十幾年の狩人生活をふつつりと断って、ただの農夫に還って老先を田地の改良などやっていたのである。実は狩りほど面白い仕事はなかったと言う。いくらやかましく言われても、耕作などはとても辛抱ができなんだそうである。そう言うておるだけ、ひどく謙遜した回顧談であったが、愉快なことはその老人が、諦めたなどと言いながら、話の間の手にこっちが語る他国の狩りのことを、珍しがって聞こうとする態度であった。

その晩さらに家へ訪ねると、一人で茶を汲んだり菓子を出したりして、歓待してくれた。そして若い頃獲た大鹿の皮で、自身が縫ったというタツツケの、ぼろぼろに綻びたのを納戸の隅から捜し出して見せてくれた。鉄砲もはや売ってしまって、残るものはもうこれだけだと言うた。

こうして猪狩りの話も、納戸の隅に置き忘れたタツツケの如く、すでに過去の物語になりつつあったのであるが、一方相手の猪は、まだ盛んに出没していたのである。現にこの老人の耕した田の稲も、年ごとに荒らされつつあったのは、矛盾だか皮肉だか判らなんだ。